

よりよい学びの場の決定のために今確かめておきたいこと

就学時健康診断が実施される時期となりました。これから入学・進学など、ライフステージの移行を迎える方々にとって期待と不安と変化の大きい時期になってきます。

教育相談を担当していると、保護者の方から、「本当にこの選択でよかったのだろうか」「聞いていた話と違うように感じる」など、学びの場やその決定についての相談を受けることがあります。一方で、5月、6月と月日が経過していくにつれて「子どもの学びが充実している」「学校は子どものことを理解し、成長につながる支援や手だてを考えてくれる」など、とらえ方が変わっていく例も見られます。

これらの事例を通して、学びの場を検討する時期に、学校や教育委員会が、学びの場の検討に関連する幅広い情報を正確に伝え、本人や保護者が様々な情報を十分に得たうえで考えたり話し合ったりすることが大切だと感じます。

今回は、新年度の円滑なスタートに向けて、学びの場の決定にかかわる全員が今確かめておきたいことについて考えてみたいと思います。



<学びの場決定の最も本質的な視点>

本人が「わかる」「できる」「もっと学びたい」と感じ、自分自身の成長を実感できる環境が「よりよい学びの場」と言えます。「障害のある子供の教育支援の手引～子どもたち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～」(以下「手引」)では、次のように述べられています。

(前略) それぞれの子供が、授業内容を理解し、学習活動に参加している実感・達成感をもちながら、充実した時間を過ごしつつ、生きる力を身に付けていけるかどうかという最も本質的な視点に立つことが重要である。

文部科学省(2022)「障害のある子供の教育支援の手引～子どもたち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～」P.2～3

学びの場の決定に関係する全員が本人を中心に、「本人にとっての学びの充実」という視点で対話を重ねることが大切なのではないでしょうか。

<対話の際に大切にしたいこと>

家庭と学校が、対話を通して子どもの成長を確かめ合ったり、成長を共に喜び合えたりする関係を築き、継続することが重要です。そのためには、学校や教育委員会に、保護者が判断できるような情報をわかりやすく提供することが求められます。



これらも参考にしながら、対話を通して新年度への見通しや安心感につなげたいものですね。

対話の際に共有する情報の例(「手引」より)

- 小中学校等と特別支援学校双方で受けられる教育内容、支援体制を含む基礎的環境整備
- 「障害者差別解消法」に基づく合理的配慮の提供
- 可能な範囲で医学等の専門的見地も含めた学校卒業までの子どもの育ちの見通し
- 教育支援委員会等による就学先決定の方法
- 就学後も必要に応じて学校や学びの場を見直すことができること
- 通級による指導等の多様な学びの場を活用する方法
- 学校における合理的配慮の提供に関する意思の表明から合意形成までの手続き
- 卒業後を含むライフステージに応じて、小中学校等や特別支援学校における教育による成長事例